

疑問、なぜ、水歯、忍歯などという名をつけられたのであろうか。

考察、当時隣国新羅の法制には、王位継承は身体強健で、歯ならび正しく整い、歯の色もしろく美しい者が選ばれるという制約があって、歯列が平準で正しく整い、あたかも一枚板のようにみえる歯の持ち主であることが条件のひとつであった。

また、水は準なりとあって整然とした方型歯窩を想像することができる。

仁徳帝は15代応神天皇のお子、神功皇后の孫にあたられるが、神功皇后は新羅征討を敢行した方だし、神功皇后のお子、品陀和気の命は仲哀帝の後を継いで応神天皇となられた。そのころ百済は朝貢してきていた。

おそらく、百済、新羅のあつれきをもろにこうむって、親新羅派と親百済に分れて抗争が激化したにちがいない。

仁徳帝は仁慈、高德のお方、しかも親新羅派で、履中帝は中を履（ふ）むその名からも穏健中道の人、反正帝は気性の激しい方で、目的の為に手段を選ばぬという行動が目立ったのではないだろうか。

仁徳帝の長男、履中帝に反逆を企てた二男、墨江の中津王との経緯を日本書紀ではものがたりふうに記述している。

この反逆事件について、裏工作に暗躍したと思われる、三男、蝮（たじひ）の水歯和気命は、後に皇位を継ぎ、反正帝となった。

仁徳陵、記に 毛受耳原、紀に、百舌鳥野

履中陵、記に 毛受、紀に、百舌鳥耳原、

反正陵、記に 毛受野、紀に記載なし。

昔、互に新羅の法制をみつめて動いた仁徳父子の三陵は、今、恩讐を越えて、仲よく指呼のあいだにある。

25) 入目入歯師について

新藤 恵久

柘植 三郎

本会評議員であった故柘植三郎の旧宅（三重県

安芸郡河芸町）の物置で同家の先祖が江戸期から明治期に使用した入目入歯師の看板や、入歯製作器具、文書などとともに安政年間に作られたと思われる義眼の製作工程を示す蠟石より完成品までの資料が発見された。この義眼は蠟石を基盤にガラス製の眼球をはめた精巧なもので、木床義歯の前歯の歯型彫刻の技法と材料を応用したものであることがわかる。

わが国の義眼の祖と思われものとして、12世紀中葉より仏像にはめこまれた玉眼があるが、義眼に関する専門書としては、天保2年（1831）発刊の「眼科錦囊」（本庄晋一著）がある。書中に「本来出於玉匠工治之手 而非医門之任也 然近時眼科 伝習其術 秘其技 唱其奇・・・中略・・・其製用硝子 造内形之眼面 在其後面 彩画白膜角膜瞳孔之形状・・・中略・・・模写宜倣西洋油画法」とあり、製作法にも言及している。

26) 日本の蜜蠟鑄造

新藤 恵久

中国で蜜蠟による鑄造技術が発明されたのは、春秋時代（紀元前5～8世紀）とされ、古代エジプト、古代ペルシャでも行われていたという。

中国の古代青銅器の鑄造には、「陶汜法」と「失蠟法」が併用されているが、「失蠟法」は、仏教の公伝とともに朝鮮半島から日本に伝えられた「蠟型鑄造法」と基本的に一致する。

この「蠟型鑄造」に用いられた蜜蠟は、中国より渡来した貴重品で、鑄造のほか宮廷や寺院の一部で蠟燭として用いられた。遣唐使の廃止された平安時代に、鑄造仏にかかわって木彫仏の全盛期を迎えた一因として、蜜蠟の輸入の杜絶もあったのではないかと筆者は考えている。

蜜蠟の国産化が進んだのは、江戸時代に入ってからと考えられ、文政9年（1826）の「中陵漫録」には、長州の上蠟（蜜蠟）と会津の木蠟による鑄印の技法が記されている。古代の失蠟鑄造技術は、現代でも金属工芸家によって継承されている。

「失蠟法」を初めて歯科に導入したのは、Tagger